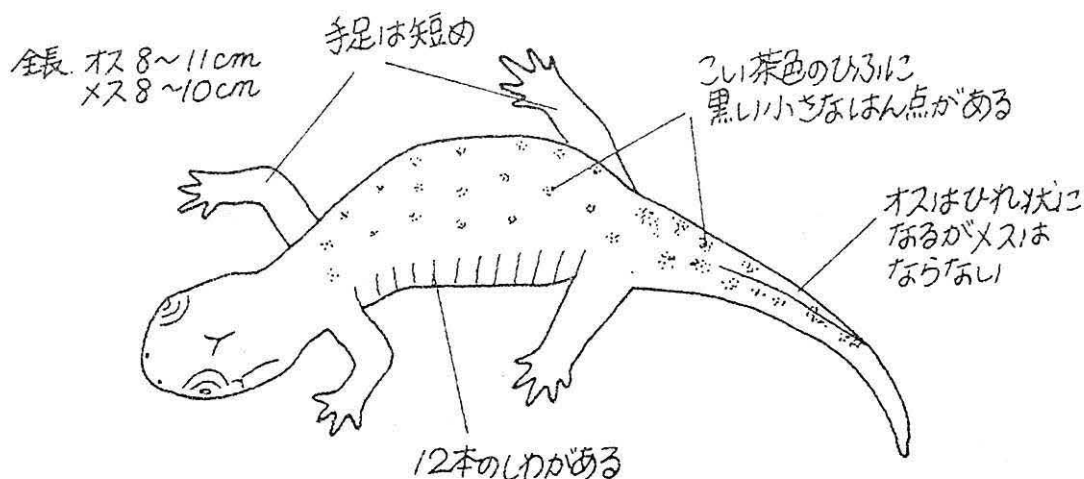


# ホクリクサンショウウオの 発見

ホクリクサンショウウオは、最近、富山県と石川県の丘陵地帯で見つかった新種の<sup>両生</sup>類（カエルやイモリの仲間）です。雪解け後の早春が産卵の季節です。日本で新種のせきつい動物（魚、カエル、ヘビ、鳥、ネズミなどのせ骨のある動物）が発見されたのは大変珍しく、最近では、中部地方から<sup>近畿</sup>地方の山地に生息するナガレヒキガエル、<sup>沖縄</sup>のマンバルクイナくらいですから、大変貴重な発見といえます。

最初の発見は昭和46年4月で、場所は能登半島の<sup>羽咋</sup>市の小学校のグラウンドの溝です。ひものような袋に入った卵と、大人の手のひらにのるくらいの親が発見されました。ちょうど産卵のためグラウンドのわきの山から降りてきたのです。最初は京都の<sup>丹後</sup>半島にすむ



ホクリクサンショウウオ(メス)

アベサンショウウオではないかと考えられていましたが、よく比較してみると、歯の並びかた、体形、体色など、日本のどのサンショウウオとも異なり、最初の発見から10年以上たった昭和59年に発見者の竹田俊雄先生にちなみヒノビウス・タケダイという学名で、新種として発表されました。

産卵は2月から4月に行われます。山あいの<sup>湿</sup>地に最初にオスが集合し、メスを待っています。水温は人間にとっては冷たく感じる10度くらいですが、サンショウウオにとっては産卵にちょうどよい水温のようです。メスは水草の根元などよい産卵場所を見つけ卵の入った袋を産みつけるとさっさと山にかえっていきませんが、オスは卵の周辺にいて次のメスが現れるのを待ちます。山での生活はほとんど分かっていませんが、夜行性で落ち葉の下などにすみ、ミミズなどを食べているのでしょう。40日余りで卵からかえった<sup>幼生</sup>（カエルのオタマジャクシにあたる）は初夏には約4cmほどになり、オタマジャクシが子供のカエルになるように<sup>変態</sup>して山に散っていきます。

ホクリクサンショウウオはほとんど人目にふれることなく、ひっそりと暮しています。自立たず、目につきにくいことが、最近まで発見されなかった大きな理由の一つでしょう。（南部 久男）



富山市科学文化センター

富山市西中野町1丁目8番31号（〒939）

電話 富山(0764) 91-2123(代表)

昭和63年4月 / 日発行